

# 朝をひらく

永田 円了  
真国寺住職



日常のささいなことが、人の意識を深めるきっかけになることがある。女房がつくった大盛りスパゲティが食べきれず、残った分を外の畑の隅に捨てたときのこと。

「私の作った料理よりカラスのほうが大事なの？」。寺の周りに共生するカラスに供養したつもりだった。いつものことである、がその時ばかりは女房の虫の居所が悪かったらしい。

また当日は新聞の休刊日だった。「今日は新聞が休みで寂しいな」のつぶやきに、「あら、私がいるでしょ！」と反応する。さしてどう答えたらいいものか。

## 感情に因果律？

黒澤明監督の映画「わが青春に悔なし」の中でも、原節子演ずる幸枝が夫の野毛に同じように反応するシーンがある。女性の感情の起伏はどうてい男には理解しがたい。黒澤のため息が伝わってきそうである。

しかしこれをただ女性に物事を感情的に考え、男性は論理的に、と単純に結論づけていいのだろうか。人は物事を因果律で考えようとする。こういう原因があつてこういう結果があると

分かれれば、その現象をコントロールできると思うからである。ただこの便利な考え方には危険がはらむ。人は自分のこと、他人のことを考える時、因果的に考えすぎるといふ間違いを起すからである。

い。行為そのものに意味があるはずである。善いことをする。それだけでいいのである。のちの評価を望む行動は、フェイスブックでいうなら、より多くの「いいね」を期待してネットに載せるのと同じようなもの。

電車でお年寄りに席を譲るシーンがあるとすると。「席をどうぞ」「親切にありがとうございませす」といふ会話が交わされる。しかしもし譲られた人が何も言わず座っていたらどうであろう。譲った人は不快な気分になる。なぜか、それは自分の行為に感謝を求めているからである。感謝とは聞こえはいいが、要は承認欲(エゴ)を満たしたいのである。席を譲るという行為は、理由も分析もいらな

目の前に美しい花がある。きれいだと感じる。でもなぜこの花がきれいなのかを問う人はいない。他人に暴力をふるってはいけない。なぜいけないのか、ダメなことはダメ。理由など必要ないのである。分析して結論をだす世界は、人間に感動や尊敬を与えてはくれない。

## 理屈抜き、そのものを

女性が感情を口にするとき、これをどうにかしてほしい、と結論を迫っているわけではない。カラスであろうと新聞であろうと、何でもいいのである。ただ今の感情そのものを理屈抜きに、そのまま受け入れてほしいのである。